



魅惑の桃尻温泉郷

女子大生と恋の四角関係

庵乃音人

挿絵／ロッコ

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION

第一章	ブルマ美少女の全裸がに股平泳ぎ	4
第二章	年上美女と汁だく露天風呂	43
第三章	魅惑の裸エプロン	84
第四章	先輩との初エッチは分校の和式便所	132
第五章	美人姉妹との淫らな地下室3P	193
第六章	泡まみれの淫乱ソープ天国	235
エピローグ	パイズリ肉弾ハーレム	282

登場人物

Characters

瀬谷 貴史

(せや たかし)

東京出身の純朴な大学生。夏休みに密かな恋心を寄せる祈里の誘いで宇麗尻村にやってくる。

敷島 祈里

(しきしま いのり)

貴史と同じ大学に通う先輩。弓道を始めスポーツ全般を得意としている文武両道の大和撫子。宇麗尻村で代々村長を務める名家の家柄。

宮森 志摩子

(みやもり しまこ)

清楚可憐な母性豊かな女性。子供好きで保育士をしている。望まない婚約を取り消すため、祈里と貴史に協力を求める。

宮森 夏海

(みやもり なつみ)

志摩子の妹。初対面であるはずの貴史を何故か毛嫌いのボーイッシュな女子校生。



「志摩子さん、いいですか、こんなことして……僕、もう……」

抑えがたい欲望が、火の点いた身体に渦巻いた。両手の指で乳首を擦る。

「ふわっ、貴史さん……いいの、して……私でよかったら、いっぱい……アン……」

乳首を擦るたびに、ひくん、ひくんと熟れた女体が痙攣する。志摩子は恥ずかしそうに顔を背けた。最初から半勃ち気味だった乳芽は見る見る力を増し、ダイナミックに盛りあがった巨乳の頂でピンと痼りきる。貴史はもうたまらなかつた。

（ああ、揉めば揉むほど興奮する……ううっ、たまらなくなってきたぞ）

片房をねちっこい手つきで揉み、もう一方の乳房にむしゃぶりついた。

乳首を舌で舐め、窄めた唇で乳輪ごと締めつけて、ちゅうちゅうと吸い立てる。

「あん、た、貴史さん、だめ……あっ……ふわっ、あはあ……」

野卑な音を立てて吸引し、舌で舐め上げるたびに、志摩子の喉から淫らな喘ぎ声が溢れた。乳房は次第に張りを増し、揉み込む指を押し返す弾力を持ち始める。

（それにしても、何て大きなおっぱいなんだ……最高すぎる……）

うっとり脳髓を痺れさせながら感嘆した。しかも、志摩子の乳はただ大きいだけでなく餅肌で、粘るように手のひらに吸いついてくる。

「貴史さん……あはあ……」

湯のなかに手が潜り、再び貴史の勃起を握った。白魚を思わせる細い指で逆手に持ち、しこしこことリズムカルにしごきあげてくる。

「ううっ、志摩子さん、ぼ、僕……おかしくなりそう……」

しごかれるペニスから疼きが走る。貴史はもう一方の乳房も同じように口に含み、生臭い唾液まみれにして吸った。解放した方の乳房の先端は涎でぬめ光り、お湯とは別のネバネバした光り方をして、乳首から唾液を粘り伸ばす。

「あうっ、す、好きにして……ほんとお嫁さんだと思って……好きにして……！」
牝の快樂スポットを執拗に責められ、志摩子もまた興奮が増したのか。せつない想いを伝える言葉は媚びた甘さと、蠱惑的な色香をいつそう強く滲ませた。

「はあはあ……し、志摩子さん、立って……」

理性が麻痺し、卑猥な欲望が肥大する。たつぷりと巨乳を味わい終えた貴史は、志摩子のお尻と、もつとも秘めやかな部分に下品な責めを加えなくなった。

「あん、貴史さん……あっ……」

腋の下に手を差し入れて風呂のなかに立たせ、腰を掴んで後ろ向きにさせた。バランスを崩した志摩子は前のめりになり、湯船の縁に両手を突く。目の前に、大迫力の逞しい肉尻が突き出された。色白の尻が薄桃色に染まり、湯気を上げながら揺れる。

(ああ、お尻……志摩子さんの……お尻……)

乳房同様、見事に熟れきった肉尻の眺めに、貴史は発奮した。

乳房をまさぐる手つきで双子の尻を鷲掴みにし、やわやわと揉みしだく。指と指の間からひしゃげた肉がくびり出されては元に戻った。

「やだ、貴史さん、あん、恥ずかしい……お尻……お尻は……ああ……」

いやがられると、よけい肉悦が増した。恥ずかしそうにくねる尻肉を掴み、肉まんでも割るようにくぱつと左右に広げる。

「ああん、いやああ……」

志摩子の声がさらに艶っぽく跳ね上がった。お湯まみれになった尻の谷間が裸電球の明かりに晒される。鳶色のアナルが、見られるのを恥じ入るようによく収縮した。肉の窄まりの左上にほくろがあるのも猥褻感を煽る。

「志摩子さん。ああ……」こらえきれない劣情に憑かれた貴史は尻肉を左右に割り開いたまま、尻の谷間に顔を埋め、突き出した舌で肛肉を舐めた。

「はひゃあ、だめ、貴史さん……は、恥ずかしい……いやあ……」

いきなりそんなところを舐められるとは思っていなかったのか。志摩子は身体をビクンと震わせ、いやがって尻をくねらせた。

風呂のお湯が派手に波打ち、洗い場にまで飛沫が飛び散る。

(志摩子さんの肛門……ううっ、ザラザラして、舐めるたびにひくついて……ああ、興奮する……！)

肛肉を舌で舐めながら、左右の尻肉を中央に寄せた。柔らかで弾力に富んだ二つの臀肉に顔面を締めつけられ、痺れるような恍惚感に囚われる。

窮屈な尻の谷間で左右に顔を振り、菊蕾を何度も舌でこじった。

「あうっ、いやん、貴史さん、だめ、そんなに舐めないで……ああ……」

お湯がチャプチャプと波打つ音に、志摩子の喘ぎ声が重なる。貴史は肛門に舌をあてがい、ゆつくりと下降させた。

「あつ、やだ……あつあつ、ふわっ、あん、だめ……ああ……」

尻の谷間を抜け出した舌が、蟻の門渡りに到達する。桃のような尻肉に大粒の鳥肌が立った。貴史は舌を離し、会陰の下にある卑猥な眺めを見つめる。

(ううっ……これが……女の人の……)

ネット時代の青年である。興味にかられてアクセスした海外のポルノサイトなどで、無修正の女陰を見たことがないといえば嘘になった。

だが生で目にする女性器のインパクトは、映像で見るそれらとは桁違いの猥褻さだ。

大陰唇は、ほとんど肌の他の部分に近い色をしていた。肉ラビアは小さめの気がしたが、淡い桜色をしていて何とも初々しい。

(ク、クリトリス……クリトリスは……ああ、これか……)

開花しかけたように左右に割れるラビアの上に、桃色の肉莖に包まれた豆粒があった。まだ完全には勃起しきっていないのか、包皮のなかに実を隠している。

陰毛は手入れでもされているように、見事な小判形をして恥丘を彩っていた。

「貴史さん、お願い……そんなに見ないで、恥ずかしい……」

貴史の視線がもつとも恥ずかしい部分に注がれていることに気づいたらしい。志摩子はいたたまれなさそうに尻を振り、窮屈な体勢でこちらを振り向いて懇願した。

「今度はこっち……な、舐めてもいいですか……?」

「えっ……ああっ……」

返事も待たず、肉ビラのなかに舌を突き入れた。とろつとした粘液にまみれた、貝肉にも似た感触の牝肉が舌を迎える。志摩子は「あああ、いやああん」と艶めかしい声を上げ、それまで以上に身体をくねらせて身悶えた。貴史はそんな志摩子の動きを尻肉を掴んで強引に封じ、さらにレロレロと牝肉の園を舐める。

「ああん、だめええ……ふわっ、ふわああ……」

肉ビラを左右にねぶり分け、なかから現れたサーモンピンクの膣粘膜を舌でほじつた。蟻の門渡りに近い方にある窪みが、多分膣穴に違いない。

膣穴のとば口をしつこく舐めると、志摩子は「ああ。あああ」と悩乱したよがり声を上げ、やがて穴のなかからどろりと濃密な粘液を溢れ出させた。

（これって愛液だよな。つてことは……ああ、志摩子さん、本気で感じてるんだ）
自分の舌で年上の美女をよがらせていると思うと、いっそう淫悦が増した。

脳裏を一瞬、祈りの姿がよぎる。なぜだか、志摩子に対しても罪悪感にかられた。罪の意識は嗜虐的な性欲へと変質し、秘割れを舐め上げる舌の動きをより激しいものに変える。

ちゅば、ぢゅるば、びちやびちや、れぢゅ——。

「ああ、やだ、恥ずかしい、貴史さん、そんなに舐めないで……あはああ……」
志摩子の声と動きに切迫したものが混じった。

尻桃がエロチックにくねり、ふとももの肉が震える。前屈みになっているため、重力に負けた巨乳がダラリと垂れ、勃起乳首を踊らせて互い違いにたぶたと揺れた。

「志摩子さん……」感激した声を上げ、貴史はしつこく女陰を舐める。

「だ、だめ……見ないで……あん、いや、見ないでえええ……ああああ！」

「あつ……」

熟れた女体が跳ね、ビクンビクンと痙攣した。

乳房を、尻を、ふとももの肉を震わせながら、志摩子は変な角度に上体を折り曲げ、あんぐりと口を開いたまま恍惚の面持ちになる。

(もしかして……イッチャった……?)

貴史は風呂のなかに座りこんだまま、湯船の縁に手を突いてアクメの余韻に酔い痴れる志摩子の姿に見入った。ようやく絶頂の呪縛から解き放たれたらしい志摩子は、ぐったりと脱力して腰砕けになる。貴史はそんな志摩子を背後から抱きとめた。

風呂のなかのお湯が大きな飛沫音をあげて四方に飛び散る。

「だ、大丈夫、志摩子さん？」

腕のなかで荒い息をつく志摩子に、心配して声をかけた。生まれて初めてのクンニで年上の美女をこんな風にさせられたなんて、何だかちよつと誇らしい気がした。

「恥ずかしい……はあはあ……私……」

「もしかして……イッチャった……ですか？」

「あん、貴史さん……」

答える代わりに、志摩子は身体を反転させ、甘えるように抱きついてきた。

二人は再び口づけを交わし、強く口を吸い、舌と舌を絡めあう。

「のぼせちゃったでしょ？ あがつて。今度は私が気持ちよくしてあげる……」

志摩子は貴史の手を取り、湯船から洗い場へと一緒になって移動した。ちよつと動いたびに卑猥に弾む乳房と尻肉のエロスは、もはや猛毒に近かった。

うながされ、洗い場の椅子に座らされる。いやらしい行為の連続で、ペニスは今にも腹の肉にくつつきそうなほどガチンガチンに反りかえっていた。

洗い場の一角に置いてあったボディソープのボトルを押しつけて粘液をたっぷり取る
と、志摩子は両手を使って泡立て、乳房や腹に泡を塗りたくった。

「貴史さん……可愛い……」

アクメに達した浅ましい姿を見せてしまったことで、いつそう大胆になっていた。
貴史に背後から抱きつき、ぬめる巨乳をスポンジみたいに背中に擦りつけてくる。

「うわっ、ああ……」

勃起乳首が肉に食いこみ、ジグザグのラインを描いて肌を擦った。志摩子は泡まみ
れの手で貴史のペニスを掴み、さつき以上の激しさでしこしことしごき立てる。

「あつ、ああ、志摩子さん……ああ……」

「どうしたらいいの……はあはあ……貴史さんが好き……好きでたまらないの！」

甘い吐息を耳朶に吹きかけ、たおやかな乳房を背中に擦りつけながら、志摩子は熱っぽい手つきで肉棒をすごいた。股間にたちまちブクブクと泡が立つ。

ソープのぬめりが潤滑油代わりになり、陰茎をすべる志摩子の手は風呂のなかでしごいてもらったときの何倍も気持ちいい。

「ここでしょ、貴史さん？ 男の人……ここをこうされると気持ちいいんでしょ？」

志摩子のヌルヌルした手が集中的に亀頭を責めた。もつとも鋭敏な快楽神経の集中した場所を上へ下へと擦過され、しぶくような気持ちよさが爆ぜる。

「うわっ、志摩子さん、それ気持ちいい……」

「勉強したの……あうっ、ふはぁ、少しでも……悦んでほしくて……あっあっ……ね、ねえ、男の人のおちんちんって……みんなこんなに大きいのか？ すごい……」

手のなかをすべるペニスの大きさに、志摩子は今さらのように感嘆の声を上げた。

「いや、ど、どうなんでしょ……あぁ……」

縮こまっているときはさほどではないが、海綿体が膨張して反りかえると、貴史の陰茎は二十センチほどにまで大きくなる。志摩子が驚くのも無理はなかった。

「あん、ふはぁ……」

乳首が背中に擦れることで、志摩子も淫らな快感を覚えるらしかった。



「僕に聞いてください。好きな人はいるのかつて。今度は嘘つきません」

「えっ……！ た、貴史くん……ああ……」

ブラカップをグイッとずり下げ、たわわな乳房を露出させた。

ダイナミックに揺れながら、大きなおっぱいが晒される。ずりさげたブラとはだけた胴衣のせいで柔らかな肉が変形し、くびり出されたままいやらしく踊った。

貴史はそんな双子の乳肉の先端を下から握り、搾乳の手つきで嬲り抜く。

「ああ……貴史、くん……んああ……」

祈里は当惑し、いやがって身をくねらせた。左右に揺れる剥き出しの巨尻がジーンズ越しに亀頭を擦過し、甘美な電流が走る。

「先輩……僕、先輩を……前からずっと好きでした……！」

「えっ……」 貴史の告白に、祈里は驚いて目を見張る。

「でも臆病だから……僕みたいな平凡な男が、先輩のような素敵な人を好きだなんて言えなくて。でも言えばよかった。そうしたら、こんなことには……」

「貴史くん……」

「先輩は僕のことどう思ってくれますか？」 心臓を打ち鳴らし、思いきって聞いた。「えっ。そ、それは……」 答えに窮したように、端正な美貌がさらに朱色に染まる。

「だめですか？ 僕なんかじゃ……やっぱり話になりませんか？」

いつしか貴史は祈里の乳房をしごきつつ、自分から股間を柔らかな尻肉に擦りつけていた。祈里の首筋に接吻をする。

「あはああ……いやん、だめえ……うっ、うう……」

汗ばんだうなじは少ししよっぱかったが、胴衣に包まれた肉体から立ちのぼる香気は乳臭さと甘ったるさの双方をたっぷりとたたえていた。

「先輩……愛してます……愛してる！」

「あつ、ああ……貴史くん！ あつ……」

貴史は突然、祈里の身体を反転させた。

超至近距離で真正面から見つめあう。貴史を見上げる瞳が色っぽく潤んで揺らめいた。そんな祈里を掻き抱いて熱っぽく抱擁し、狂おしく唇を奪う。

「先輩……祈里先輩……んっんっ……」

ちゅう、ちゅぱ。ぢゅるぱ、ぴちゃ、んぢゅぱ。思いきり口を吸い、無理やり舌を差し込んで舌を求めた。温かな鼻息に顔を撫でられる。

「あうっ、貴史……くん……んっ……」

最初は戸惑いがちだった祈里の反応が次第に変わり、自らも積極的に口を吸い、舌

を絡めだしてくる。両手が貴史の首の後ろに回り、髪をクシヤクシヤに撫で回した。両手で乳房を掴み、すくい上げるように揉みながら爛れた接吻に耽る。

ジーンズのなかで張りつめすぎた男根が、痛みを覚えた。こらえきれず、ベルトをガチャつかせると、下着のボクサーショーツごとジーンズを脱ぎ捨てた。

雄々しく勃起した肉棒が天に向かって亀頭を突き上げる。祈里の手を取り、股間に導いた。焼けるように熱くなった怒張に触れると、祈里は「いや……」と恥ずかしそうに手を放す。だがもう一度、さつきより強引に握らせると、今度は拒まなかった。

「ああ、た、貴史、くん……？　ううっ……」

「しごいてくれませんか、先輩……先輩を想って……僕、もうこんなに……」
言いながら、片手を祈里の股間に潜らせた。

「ふわああ……貴史、くん……あん、いやあ……」

「しごいて……お願いです……一緒に……いやらしいことを……先輩……」

なおも口を吸い、舌を絡めて懇願し、卑猥なワレメをスリスリと愛撫した。

「あん、だめ……やめて……あうう、は、恥ずかしい……ふわっ、あああ……」

口のまわりを貴史と自分の唾液でベチョベチョに濡らして羞恥しつつも、祈里はぎこちなく手を動かし、白い手に握った勃起をしこしことしごき始めた。

志摩子と同じように、いや、それ以上にぎこちなく、たどたどしいしごき方。だが祈里にしごかれていてと思うだけで、一気に恍惚感と射精衝動が増す。

「先輩……き、気持ちいいです……」

「はうっ、いや……貴史くん……貴史くんには、志摩子姉さんが……ああ……」

小便の残滓と貴史の唾液で、祈里のワレメはネットリしたぬめりを帯びていた。

しかもクンニをしたときより、いっそう潤みが増している。陰茎をしごかれる快感にうっとりし、お返しのよう肉ピラを掻き分けて、敏感な腔粘膜を指でほじった。

「ああああ、あっあっ、やん、だめ……ふわああ……」

「分かってます。志摩子さんに悪いことしてる。でも僕、もうどうにも我慢が……」

「た、貴史くん……」

「先輩……好きなんです……愛してます……」もう一度言った。

祈里は——拒まなかった。

それこそが、祈里の気持ちを物語る雄弁な答えだと思った。

「ああ。ああああ……」擦れば擦るほど、祈里の肉割れはさらに淫らな潤みを増し、又チヨ又チヨと下品な汁音を立てる。決して巧みではないはずの貴史の愛撫に、祈里もまたふしだらな高揚感を露わにしてくれた。

「どうしよう……だめなのに……志摩子姉さんのために……あきらめたのに……」

やがて、今にも泣きそうな声で祈里が言った。

「い、祈里先輩！」

貴史は歓喜した。ついに祈里の口から、焦げつく思いで欲していた言葉が零れたのだ。嬉しさを爆発させた貴史は、「先輩。先輩」と甘えるように言いながら、ワレメから、その上部に鎮座する肉豆へと責めの矛先を転じる。

「ああああ、あつあつ、やだ、そこ……そこは……ふはああ……」

クリトリスは、薄桃色の肉莢に包まれていた。

少しずつ女性の扱いに慣れ始めていた貴史は肉莢を指で摘み、枝豆を飛び出させる要領で、なかからムニユツと肉真珠を絞り出す。

「ああああ……」

祈里自身の体液でぬめ光る淫核が露出した。祈里を愛しく思うあまり嗜虐的な肉悦が膨張した貴史は、紅色の肉芽を指で揉みつぶし、円を描いて愛撫する。

「きやああ……やん、だめええ……んはああ、ああああ……」

祈里の喉から溢れ出す声がいっそう切迫した、猥褻な艶を帯びた。

揉めば揉むほど、ずる剥けのクリトリスは痲りを増し、艶めかしい弾力で指を押し

返す。貴史の愛撫に、祈里は腰をくねらせ、巨大な尻を左右に振った。

「あん、いやん。あああ」

男心を惑乱させずにおかない喘ぎ声を上げ、取り乱した仕草で肉棒をしごきあげる。
「先輩……一つになりたい……先輩がほしいです……ほしい……」

口から首筋へと唇を移し、汗ばんだ肌をついばむようにキスの雨を降らせて、甘えた声で求めた。そんな貴史の訴えに、祈里は興奮しながらもかぶりを振る。

「こ、こんなところで……それにわたし……おしっこしたのよ……汚いわ……」

「汚くなんかいいです……先輩……汚いって思うなら、僕が……」

貴史は突然その場に屈みこむと、祈里の両足に伸びていたショーツを完全に耄り取った。恥ずかしがって閉じようとするむちむちした脚を開かせるべく、柔らかな内股に手をやり、荒々しい力で左右に開かせる。

「きやああ。あん、やだ、貴史くん、こんなかつこ……」

下半身を剥き出しにした祈里は、貴史の手で大胆ながに股の格好にさせられ、羞恥に染まった声を上げた。汚い壁に押しつけられるのは背中だけではなく、下品に開脚したふとももとふくらはぎまでもがびたりとくつついて肉を震わせる。腰を落とし、相撲取りが四股を踏むような姿になった祈里の下劣さに、いやでも肉悦が増す。

「ああ、いやらしい……先輩……んっ……」

もつちりしたふとももをあられもない格好に開かせたまま、なおも小便の残滓を溢れさせる尿口に舌を伸ばし、舐め浄めるように舌を擦りつけた。

「ひいいい。いや、いや、貴史くん、そんなとこ舐めないで……汚い……やだやだやだ」
「僕が綺麗にしてあげます。ちつとも汚いなんて思わないけど……んっ……」

いやがって股を閉じ、尻を振って逃げようとする祈里の動きを強引に封じた。

両手に力をこめ、愛しい先輩に野卑な四股を踏ませたまま、ミルクを舐める猫みたいにピチャピチャと淫靡な音を立てて尿口を舐める。

もつさりとし生え茂った剛毛が、尿口を舐めるたびに一緒に口のなかに飛びこみ、舌に絡みついた。敏感な舌先をチクチクと刺激する恥毛たちも貴史をそそる。

「あうっ、貴史くん……ああ、やだ、いやん……ふはああ……」

尿口を舌で拭い浄めた貴史は、肉莖から飛び出したクリトリスを唇で締めつけ、ヂユヂユツと音を立てて思いきり吸引した。

「ああああ！ や、やん、だめ……吸らないで……きやああああ——」

剥き出しの勃起豆を吸られる気持ちよさは相当なものなのだろう。祈里はそれまで以上にあられない声を上げ、慌てて口を押さえた。

「誰も来ませんよ、先輩。お願い、恥ずかしがらないで、声出して……聞きたいです、先輩が悦んでくれるエッチな声……」

貴史は卑猥なおねだりをし、なおもはしたない音を立ててクリトリスを吸引した。

「きやう……ああん、やだ……んはああ……」

強烈なバキューム吸引の責めを浴び、ピンク色の肉豆が莢のなかからずる剥けになる。窄めた唇で淫核の根元を締めつけ、喉ちんこみたいに伸長させた。

上下の歯で繊細な肉豆を甘噛みすると、手で押さえた祈里の口から「ひいひい。だめ。ひいひい」と我を忘れたような嬌声が漏れる。

「先輩……どうしたらいいんですか、僕……こんなに好きになってしまつて……」

甘噛みするたびにプニプニとひしゃげる牝の紅玉の感触に陶然としながら訴えた。優しく歯を食いこませるたびに、祈里は「ああ。あああ」と取り乱した声を上げる。肉ラビアはいつしか、開花しきつてベロンと左右にめくられていた。

剥き出しになったローズピンクの膣穴から、とろとろと粘り汁が溢れ出し続ける。

（それにしても……ああ、やつぱりこの剛毛、たまらない……）

下卑た肉欲に憑かれた貴史は、祈里の恥丘いっぱいにもさもさと密生する秘毛の眺めに痴情を炙られ、縮れ毛の繁茂に顔を埋めて左右に振つた。

「やん、ああ、貴史くん……あつあつ、ふはああ……あああ、おとおお……」

剛毛への顔ズリは、同時にクリトリスや肉割れを鼻や唇で擦り立てる責めにもなった。祈里はもう股を閉じようとはせず、いやらしいがに股になったまま、股間の剛毛を掻き回され、敏感な恥部を嬲られる刺激に獣じみた声を上げる。

その手は口から離れ、背後の壁をガリガリと掻き走った。

（ああ、先輩……すごい声……もしかして……イッチャウのか……？）

明らかに様子の変わった祈里の反応に興奮した貴史は、いつそう激しく顔を振り、舌を突き出した。逆三角状に恥丘に生える大量の陰毛をモジヤモジヤとそそげ立たせつつ、鼻でクリトリスを、舌でワレメを弾くように擦るサディスティックな責め。

「あおお、貴史くん、だめ……おとお……おとおおお！」

「あ……」

ごぼつと音を立て、膣穴から大量の粘蜜が溢れ出した。さつきまで透明だった愛液はところどころ白濁し、練乳と蜂蜜が混じり合ったような眺めを醸し出している。

「ああ、先輩……」

「あううつ、や、やだ、見ないで……こんなわたし……あつあつ……おおうう……」

なおも両足を開かされた不様な格好のまま、びくんびくんと女体を痙攣させた。

ブラジャーと胴衣にくびり出された巨乳が派手に揺れ踊り、ポニーテールの髪が振り乱れる。溢れ出した愛液が長い糸を引いて床に粘り伸び、振り子みたいに揺れた。

4

「先輩……イッたんですね……嬉しい……でも……ねえ、先輩……これでもう終わりだなんて言わないですよね……？」

自分の責めで愛しい女性をアクメに追いやれたことに満足感を覚えつつ、貴史は再び立ち上がり、祈里の片脚を抱え上げた。

「あっ……あん、いやん……」

祈里の身体から大粒の汗が噴き出した。額も乳房も、抱え上げたふとももも膝裏も、ローションでも塗ったようにぬめ光り始めている。

「ああ、貴史くん……どうしよう……わたし、どうしよう……」

絶頂に達した祈里はなおも息を乱して喘ぎ、とろけた瞳で貴史を見た。

貴史は暴発寸前のペニスを取り、膣穴にクチュッと亀頭を押しつける。

「ああん……」

甘酸っぱい快感が鈴口から閃いた。身長差は八センチぐらいはあるだろう。祈里は雪駄を履いた片脚を爪先立ちにし、両手を貴史の首に回して弱々しくかぶりを振る。

「こらえきれない……志摩子姉さんに何て言えばいいの……気持ち……もう抑えられない……」

「先輩……」膣穴にあてがった亀頭を上下に動かした。肉ビラを掻き分けた鈴口が、卑猥な音を立ててワレメをほじる。

「ああ、貴史くん……感じちゃう……あふうう、痺れちゃうん……」

「いいですよね、入れても……一つにならせてくれますよね……」

擦れば擦るほど、さらに淫らなぬめりを増す膣粘膜の気持ちよさに恍惚としつつ、貴史は亀頭で秘唇をえぐった。

祈里は感極まった顔つきになり、またも貴史の唇を求める。キスをすることで甘美な疼きがいっそうペニスに走り、悪寒のような快感が背筋から脳髓に突き抜けた。

「もう……しちゃったんだよね、志摩子姉さんと……」口を離し、志摩子が言った。

「せ、先輩……」

「幸せそうな志摩子お姉さん……見てれば分かるもん……」

答えに窮し、貴史は当惑する。

「だめなのに……志摩子姉さんに顔向けできないのに……貴史くんに大人にしてもらいたいわって夢だけは……かなうのね……」

祈里は恥ずかしそうにしながらも瞳を潤ませ、健気に微笑んだ。

「ああ、祈里先輩！」

こんな可愛いことを言われて、いったいどうすればいいというのだ。

貴史は感激と興奮で全身を過熱させ、グイッと腰を突き出した。

「ああああ……！ い、痛いっ……」

緊張して力を入れるいとまも与えないほど迅速な突き込み。貴史のペニスは亀頭をひしゃげさせながら、ヌルヌルした窮屈な膣道に勢いよく飛びこんだ。

「ううっ、痛い……くううう……」

小便をする犬みたいに高々と片脚を抱え上げられたまま、祈里は貴史にしがみついた。淫靡な熱を持った巨乳が胸板に当たり、ぷにゅうつと柔らかくつぶれる。

痲りきった勃起乳首が胸の肉をえぐり、貴史を痺れさせた。祈里はくぐもった呻き声を漏らし、貴史の首筋に熱い吐息を漏らす。

「す、すみません、痛くさせて……我慢できますか……？」

ついに祈里の処女まで自分のもののできたことに天にも昇るような感激を覚えつつ

も、抱きついてくる愛しい人を気づかった。祈里はこくりとうなずく。

「知ってる、貴史くん？ 女には……幸せな痛みが二つあるのよ」

「え……」

「一つは、大好きな人の子供を産む瞬間の痛み……もう一つは、その人に大人にしてもらえたときの、一生忘れられない……あはあ……人生で一番幸せな痛み……」

「い、祈里先輩！」

大量の汗を噴き出させた祈里の背中を汚い便所の壁に押しつけ、貴史は猛然と腰を振った。嬉しすぎて涙が出そうになる。泣くのを我慢すると、なおさら欲望が募ることもあるのだと、生まれて初めて知った。

「あっあっ、ああん、痛い……ふはあ……」

祈里は苦悶の声を上げ、いつそうせつない力をこめて貴史に抱きついてくる。

ぐちゃぬちよ、ぐちよぐちよ。ぬるちよ。

それでも二人の性器がいやらしく擦れあう部分からは、スプーンで蜂蜜を掻き回したときに聞こえるような、粘りに満ちた扇情的な粘着音が聞こえた。

（ああ、気持ちいい……亀頭が……ジンジンする……）

肉傘が掻き出す粘り蜜には破瓜の鮮血が混じって痛々しい。だが祈里の膺は、奥の



奥まで猥褻な発情汁で潤みきっていた。血と淫蜜が一つに混じり合ったエロチックな液体がむちむちした内股を伝い流れ、ふくらはぎに下降していく。

「あん、あんあん、貴史くん……今から言うこと、二人だけの秘密にしてくれる？」
汗ばんだ女体を、新たに湧き出す汗の甘露でぬめぬめと粘らせながら、祈里が首筋に温かな息を吹きかけた。

「何ですか……」

「……志摩子姉さんを裏切っても……貴史くんがほしい……もう気持ちに……嘘がつけないの！ 好き……貴史くんが大好き！」

祈里の言葉は最強の媚薬だった。必死に肛門括約筋を窄めて射精の誘惑に抗おうとしても、どうにもこらえられない。

「先輩……ああ、僕……ううう……」

ブスブスと黒い煙が立ちのぼるような生殖への欲求が、貴史の身体を野性味溢れる劣情でまがまがしく奮い立たせた。爪先立ちになって震えていた祈里のもう一本の脚も、膝裏に手をやって虚空にすくい上げる。祈里は壁と貴史にサンドイッチにされたまま、両足をM字に開いて宙ぶらりんになる「駅弁状態」の格好になった。

「あん、貴史くん……あつあつあつ、アン、すごい……んはああ……」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>



キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!**19日発売!**
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!

ヴァルキリー

<http://www.comic-Valkyrie.com/>

cranberry

<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille

<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元
ドリーム**

<http://www.2d-dream.jp/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!